

J.S.バッハ（岡本拓也編）：カンタータ第 29 番《神よ、われら汝に感謝す》より シンフォニア

カンタータ第 29 番《神よ、われら汝に感謝す》は、1731 年のライブツィヒ市参事会員交代式のために作曲された祝祭的な教会カンタータ。その冒頭に置かれた「シンフォニア」は、バッハ自身の「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 3 番」のプレリュードを管弦楽曲に編曲したもの。原曲のヴァイオリンによる無窮動的な 16 分音符の旋律を、編曲版ではオブリガート・オルガンが担当し、高度な技術を要する協奏曲風の楽曲に仕立てられている。

バルトーク（岡本拓也編）：ルーマニア民俗舞曲

バルトークが 1915 年に作曲した「ルーマニア民俗舞曲」は、トランシルヴァニア地方の民謡をもとにした全 6 曲からなる組曲。もともとはピアノ独奏曲だったが、バルトーク自身による管弦楽版をはじめ、ヴァイオリン編曲版なども広く親しまれている。組曲は、第 1 曲「棒踊り」、第 2 曲「帯踊り」、第 3 曲「踏み踊り」、第 4 曲「角笛の踊り」、第 5 曲「ルーマニア風ポルカ」、第 6 曲「速い踊り」から構成される。

ピアソラ：《タンゴの歴史》

ピアソラが 1986 年に発表した、フルートとギターのための組曲。1900 年代から 1960 年代までのタンゴの変遷が 4 つの音楽で綴られる。まず「Bordel 1900（売春宿 1900 年）」では、初期の活気に満ちた、明るくテンポの速いタンゴが奏される。ゆったりとした楽章の「Café 1930（カフェ 1930 年）」では、「踊るための音楽」から「聴くための音楽」への変化が描かれる。「Nightclub 1960（ナイトクラブ 1960 年）」では、ブラジル音楽の要素が混ざり、現代的でリズムカルな「ヌエヴォ・タンゴ」へ進化する。終楽章の「Concert d'aujourd'hui（現代のコンサート）」では、前衛的で複雑な現代音楽としてのタンゴが完成する。

／他